

【研究ノート】

インシデント・アクシデント発生時における 多重課題業務と月経前期や不定愁訴との関連

Relationship between Multitasking Work and the Premenstrual Phase or Unidentified Complaints when Incidents and Accidents Occurred

小西 清美, 名城 一枝, 仲村美津枝, 石川 幸代, 長嶺絵里子

要旨

本研究では、看護現場におけるインシデント・アクシデント報告を調査し、多重課題の業務と月経前期や不定愁訴との関連について、明らかにすることを目的とした。分析対象者はA県内の5総合病院において、インシデント・アクシデント報告した人のうち、その時の業務状況と月経状態を回答した169人である。調査方法は、無記名自記式質問紙調査を郵送法で行った。その結果、インシデント・アクシデント報告した中で、多重課題有群は63.5%であった。多重課題の有無別比較で、インシデント・アクシデント報告の内容やその理由とは関連はなかった。また、月経前期においても関連はなかった。しかし、インシデント・アクシデント発生時には、多重課題業務と不定愁訴において関連があることが示唆された。

キーワード：インシデント・アクシデント報告, 多重課題業務, 月経前期, 不定愁訴

I はじめに

看護職は、多重課題、作業中断、時間切迫といった、ヒューマンエラーを誘発する要因に常に囲まれており、危険とプレッシャーのなかで看護を実践している⁽¹⁾。ヒューマンエラーとは人間の持つ特性が人間を取り巻く環境とうまく合致していないために、結果として誘発されたものとされ、人間と環境の不整合から起こる。女性の特性として、特有な月経に関する悩みがある。月経痛に対しては労働基準法により生理休暇は定められているが、月経前症候群 (PMS: Premenstrual Syndrome) については法的には定められていない。月経前症候群は日本産科婦人科学会用語解説集⁽²⁾では「月経前3～10日の間続く精神的あるいは身体的症状で、月経発来とともに減退ないし消失するもの」と示されている。その頻度は全女性の50～80%⁽³⁾で、症状には、頭痛やいらいら感、むくみなどの身体的・精神的苦痛がある。

ダルトン⁽⁴⁾は、月経前症候群 (PMS) との関連として、仕事での事故の多発・作業能力の低下や誤りなど労働時間の損失について報告している。医療現場は、医療の高度化・複雑化・医療費削減の圧力・患者の高齢化や権利意識の高揚等に伴い業務密度が高くなり、業務中断等の

状況が増えつつある。医療現場が複雑多岐でかつ時間的切迫感を伴う多重課題の業務が多く、ヒューマンエラーを引き起こしやすいとされている^(5,6)。最近、新人看護師が医療事故を起こさない対策として、複雑多岐で時間切迫のある多重課題のシミュレーションで優先順位を選択して行動することを研修に取り入れており、その研修の効果・効率を高める報告も行われている⁽⁷⁾。

ところが、インシデント・アクシデント報告は減少するのではなく、その報告の中には月経による影響もあるのではないかと思われるが、それらに関する報告は見当たらない。現在、インシデント・アクシデント報告には、月経に関することは個人問題であるということから取り上げられていない。小野ら⁽⁸⁾は、インシデントの発生要因の実態を調査しており、報告内容で最も多いのが与薬業務で、その発生要因には、「つもりイメージ」、「注意先急ぎ」、「記憶居座り」、「注意掛け持ち」が約8割を占め、「療養上の世話」業務では、「注意切り替わり」が約6割を占めていることを報告している。

筆者ら^(6,9)は、多重課題に類似した指標を用いて実験研究をした結果、月経前期の時期や月経前症状を有する者でエラー率が高いことを明らかにした。本研究では、多重課題の業務下において、個人の問題とされる月

経前期や月経前症状がインシデント・アクシデント発生に影響しているのではないかと考え、看護職者を調査することにした。その調査結果をもとに、月経に関するセルフケア行動が促進できるように安全対策を講じていきたい。

本研究の目的は、看護職者を対象にインシデント・アクシデント報告の実態を調査し、インシデント・アクシデント発生時における多重課題業務と月経前期や不定愁訴との関連を明らかにすることである。

用語の定義

多重課題業務：本研究での多重課題業務とは、いくつもの業務を同時並行に行っている場面で、例えば、点滴を準備しているとナースコールがあり、同時に別の患者から訴えるような複数の業務を意味する。

II 研究方法

1. 調査対象者

A県内にある5つの総合病院に勤める看護職者で、月経を有する年齢20歳以上50歳未満を対象者とした。

2. 調査方法

調査期間は、平成23年11月から12月である。調査票は、看護部の協力を得て、研究依頼書文書と無記名自記式調査用紙と返信用封筒を同封したものを785枚配布してもらい、対象者の自由意思にて3週間内に郵送法にて回収を行った。

3. 調査内容

調査は対象者について（年齢、勤務場所、経験年数）月経について（月経周期、月経前症状）、インシデント・アクシデント報告について（報告内容、報告理由、その時の仕事の多忙度、その時の月経時期、その時の身体や心の状態）の内容になっている。インシデント・アクシデント報告における報告内容、報告理由、その時の身体や心の状態について、回答方法を以下に示した。

1) インシデント・アクシデント報告内容

過去2～3年間の記憶しているインシデント・アクシデント報告内容は、日本医療機能評価機構への報告に沿ったものを用いた。インシデント・アクシデント報告回数は個人によって変わってくるので、過去2～3年のうち、直近のインシデント・アクシデント報告について、(1)療養上の世話 (2)診療の補助 (3)記録・その他の報告内容(1)から(3)のうち、1つに「○」をつけてもらった。さらに、その時の多忙度の程度を回答してもらった。

2) インシデント・アクシデント報告内容の理由

医療ミス（人的ミス<過失>）の分類のひとつであるヒューマンエラー⁽¹⁰⁾を「うっかり思い込み多忙による

ミス」に文言を変えて具体化し、インシデント・アクシデント報告内容の理由として、「知識不足・技術の未熟性によるもの」「医療機器や医療器材の欠陥・不足によるもの」「規則違反（手順を守らなかったもの）」「うっかり思い込み多忙によるミス」「その他」から、1つ選択回答とした。

3) インシデント・アクシデント発生時の月経状態や身体や心の状態

身体や心の状態を把握するために、月経研究会連絡協議会⁽¹¹⁾のPMSメモリーの症状リストを参照して、先行研究^(6,9)の結果から症状の訴えが多かった身体症状と精神症状を16選択した。質問は「その時の身体症状や心の状態はどのような症状があったか」について想起法でインシデント・アクシデント発生時の状態を複数回答してもらった。

4. 分析方法

統計解析はSPSS17.0J for Windows版を使用した。各変数の基本統計量を算出した後、多重課題の有無別比較は、 χ^2 検定を用いた。すべての有意水準は5%で両側検定とした。

5. 倫理的配慮

対象者に看護部から研究の目的と方法および倫理的配慮を記した文書と質問紙および返信用封筒を配布してもらい、自由意思により返送してもらった。回収は返信用封筒に入れてポストに投函し返送することで同意が得られたものとした。調査は各関係機関の倫理審査委員会の承認を得てから実施した。本研究は研究計画書の段階で名桜大学人間健康学部倫理委員会において承認を受けてから実施した。

III 結果

1. 対象者の概要

月経を有する看護職を対象に785枚配布した中で、回答のあったものは540人（68.8%）であった。540人の中でインシデント・アクシデント報告をした人は497人（92.0%）で、そのうち、その時の業務状況と月経状態を回答した169人（34.0%）を分析対象とした。

表1に示すとおり、インシデント・アクシデント報告した169人（平均年齢34.0±7.1）は、20歳代54人、30歳代78人、40歳代37人であった。看護職の経験年数は5年以下48人（28.4%）、6～10年48人（28.4%）、11～20年56人（33.1%）、21年以上の経験者は16人（9.5%）であった。勤務場所は内科系55人（32.5%）、外科系40人（23.7%）、産婦人科系16人（9.5%）、小児科系3人（1.8%）、その他52人（30.8%）であった。月経周期では25～38日型が137人（81.1%）であった。月経持続日数は、3～

7日が151人（89.3%）であった。

表1 対象者の背景（n=169）

年齢	人数	(%)
20歳代	54	(32.0)
30歳代	78	(46.2)
40歳代	37	(21.9)
経験年数		
0～5年	48	(28.4)
6～10年	48	(28.4)
11～15年	37	(21.9)
16～20年	19	(11.2)
21年以上	16	(9.5)
勤務場所		
内科系	55	(32.5)
外科系	40	(23.7)
産婦人科系	16	(9.5)
小児科系	3	(1.8)
その他	52	(30.8)
月経周期（25～38日）		
はい	137	(81.1)
いいえ	24	(14.2)
不明	7	(4.1)
月経持続日数（3～7日）		
はい	151	(89.3)
いいえ	15	(8.9)
不明	3	(1.8)

2. 多重課題の有無別比較

インシデント・アクシデントの報告で、業務の状況について、いくつもの仕事を同時に行っている場面（以下、多重課題）であったかという質問に「はい」の回答は107人（63.5%）、「いいえ」の回答は62人（36.5%）と両群の人数には有意差が認められた（ $p < 0.001$ ）。

1) インシデント・アクシデント報告内容

表2に示すとおり、インシデント・アクシデント報告内容は、全体的には、「診療の補助」「療養上の世話」「記録・その他」という多い順であった。多重課題の有無別では、両群とも療養上の世話では、転倒・転落が多く、「診療の補助」では、多重課題有群のほうで10%以上が与薬、点滴で、多重課題無群は与薬、注射、検査に関することの報告であった。しかし、「診療の補助」「療養上の世話」「記録・その他」において、 χ^2 の検定の結果、多重課題有群と無群との間には関連はなかった。

2) インシデント・アクシデント報告理由

表3に示すとおり、インシデント・アクシデント報告の理由は、多重課題の有無別と「うっかり思い込み多忙によるミス」において、多重課題有群69.2%、無群62.9%、次いで「知識不足・技術の未熟性によるもの」は、多重課題有群13.1%、無群14.5%、「規則違反」は多重課題有群0.9%、無群3.2%であった。「うっかり思い込み多忙によるミス」「知識不足・技術の未熟性」「規則違反」について、 χ^2 の検定の結果、多重課題有群と無群

表2 インシデント・アクシデント報告の内容

	多重課題有群（n=107）		多重課題無群（n=62）	
	人数	(%)	人数	(%)
療養上の世話				
転倒・転落	30	(28.0)	15	(24.2)
食事指導に関すること	1	(0.9)	0	(0.0)
抑制に関すること	1	(0.9)	0	(0.0)
無断離院	1	(0.9)	1	(1.6)
合計	33	(30.8)	16	(25.8)
診療の補助				
与薬	19	(17.8)	8	(12.9)
注射	7	(6.5)	7	(11.3)
点滴	17	(15.9)	3	(4.8)
麻薬に関すること	1	(0.9)	1	(1.6)
機械類操作、モニターに関すること	2	(1.9)	3	(4.8)
チューブ類のはずれ、閉塞に関すること	8	(7.5)	6	(9.7)
検査に関すること	7	(6.5)	7	(11.3)
手術に関すること	0	(0.0)	4	(6.5)
合計	61	(57.0)	39	(62.9)
記録・その他				
情報の記録、医師への連絡に関すること	3	(2.8)	1	(1.6)
患者・家族への説明、接遇に関すること	5	(4.7)	0	(0.0)
その他	5	(4.7)	6	(9.7)
合計	13	12.2	7.0	(11.3)

との間には関連はなかった。

3) インシデント・アクシデント発生時における多忙度
その時（インシデント・アクシデント発生時）の業務の多忙度がどうであったかについて質問した結果を表4に示した。多重課題有無別多忙度の比較では、多重課題有群で「多忙」が68.2%で有意に関連があった（ $p < 0.001$ ）。一方、多重課題無群では、「普通」が53.2%で有意に関連があった（ $p < 0.001$ ）。

4) インシデント・アクシデント発生時における月経の時期
その時（インシデント・アクシデント発生時）の月経状態はどの時期であったかを質問した結果を表5に示した。

多重課題有群では、月経の時期は月経前9人（8.4%）、月経時4人（3.7%）月経後4人（3.7%）、不明87人（81.3%）であった。一方、多重課題無群では、月経の時期は、月

経前5人（8.1%）、月経時2人（3.2%）月経後3人（4.8%）、不明52人（83.9%）であった。インシデント・アクシデント発生時の月経の時期がどの時期であったかについて、両群とも不明と答えた人が8割以上であった。

3. インシデント・アクシデント発生時における不定愁訴
インシデント・アクシデント発生時の身体と心の状態にどのような症状があったかの質問に対して、その時にあった症状を複数回答にした。その結果を表6に示した。多重課題有無別比較では、身体症状である「すぐに眠くなる」において関連が認められた（ $p < 0.05$ ）。多重課題有群において、身体症状である「頭痛・頭が重い」「疲れやすい」において症状あり傾向がみられた。一方、「寂しくなったり孤独感を感じる」において多重課題有無別において関連が認められた（ $p < 0.05$ ）。

表3 インシデント・アクシデント報告の理由

	多重課題有群 (n=107)		多重課題無群 (n=62)	
	人数	(%)	人数	(%)
知識不足・技術の未熟性によるもの	14	(13.1)	9	(14.5)
医療機器や医療器材の欠陥・不足によるもの	0	(0.0)	2	(3.2)
規則違反（手順を守らなかったもの）	1	(0.9)	2	(3.2)
うっかり思い込み多忙によるミス	74	(69.2)	39	(62.9)
その他	13	(12.1)	10	(16.1)
未記入	5	(4.7)	0	(0.0)
合計	107	(100)	62	(100)

表4 インシデント・アクシデント発生時における多忙度

	多重課題有群 (n=107)		多重課題無群 (n=62)		p 値
	人数	(%)	人数	(%)	
非常に多忙	18	(16.8)	4	(6.5)	0.06
多忙	73	(68.2)	22	(35.5)	0.001
普通	15	(14.0)	33	(53.2)	0.001
やや余裕がある	0	(0.0)	2	(3.2)	0.133
余裕がある	0	(0.0)	1	(1.6)	0.367
未記入	1	(0.9)	0	(0.0)	
合計	107	(100)	62	(100)	

p 値：Pearsonの χ^2 検定、度数5未満の場合はFisherの直接法の正確有意確率（両側）の値である。

表5 インシデント・アクシデント発生時における月経時期

	多重課題有群 (n=107)		多重課題無群 (n=62)	
	人数	(%)	人数	(%)
月経前	9	(8.4)	5	(8.1)
月経時	4	(3.7)	2	(3.2)
月経後	4	(3.7)	3	(4.8)
不明	87	(81.3)	52	(83.9)
未記入	3	(2.8)	0	(0.0)
合計	107	(100)	62	(100)

表6 インシデント・アクシデント発生時における不定愁訴

		多重課題有群		多重課題無群		p 値
		n = 107	人数 (%)	n = 62	人数 (%)	
身体 症状	頭痛・頭が重い	あり	13 (12.1)	2 (3.2)	0.054	
		なし	94 (87.9)	60 (96.8)		
	肩がこる	あり	14 (13.1)	4 (6.6)	0.206	
		なし	93 (86.9)	58 (93.5)		
	疲れやすい	あり	34 (31.8)	12 (19.4)	0.080	
		なし	73 (68.2)	50 (80.6)		
	体がだるい	あり	17 (15.9)	6 (9.7)	0.256	
		なし	90 (84.1)	56 (90.3)		
	すぐに眠くなる	あり	12 (11.2)	3 (4.8)	0.020	
		なし	95 (88.8)	59 (95.2)		
	横になりたい	あり	4 (3.7)	2 (3.2)	1.000	
		なし	103 (96.3)	60 (96.8)		
	肌が荒れる	あり	5 (4.7)	6 (9.7)	0.204	
		なし	102 (95.3)	56 (88.0)		
乳房に張った感じがある	あり	7 (6.5)	2 (3.2)	0.488		
	なし	100 (93.5)	60 (96.8)			
精神 症状	集中力が低下している	あり	31 (29.0)	12 (19.4)	0.167	
		なし	76 (71.0)	50 (80.6)		
	動作が鈍くなる	あり	4 (9.7)	3 (4.8)	0.548	
		なし	103 (96.3)	59 (95.2)		
	能率が低下している	あり	11 (10.3)	4 (5.5)	0.576	
		なし	96 (89.7)	58 (93.5)		
	効率よく行動できない	あり	6 (5.6)	7 (11.3)	0.181	
		なし	101 (94.4)	55 (88.7)		
	寂しくなったり孤独感を感じる	あり	0 (0.00)	3 (4.8)	0.048	
		なし	107 (100)	59 (95.2)		
	いらいらする	あり	11 (10.3)	2 (3.2)	0.136	
		なし	96 (89.7)	60 (96.8)		
	気分がムラがある	あり	9 (5.5)	6 (9.7)	0.780	
		なし	98 (91.6)	56 (88.0)		
憂鬱になる	あり	6 (5.6)	4 (6.5)	1.000		
	なし	101 (94.4)	58 (93.5)			

p 値：Pearsonの χ^2 検定，度数5未満の場合はFisherの直接法の正確有意確率（両側）の値である。

IV 考察

1. インシデント・アクシデント発生時における多重課題業務と不定愁訴について

人間がいくつかの仕事を同時並行して行うような多重課題遂行時に、ワーキングメモリ働きの能力が必要とされる。ワーキングメモリとは、目標に向かって、一時的に必要な情報を保持しつつ、同時に情報を保持処理するといった状況で重要な働きをすると定義される。その働きが低下した時に、ヒューマンエラーを発生しやすくなると報告されている⁽⁵⁾。筆者ら^(6, 9)によると、ワーキングメモリ働きの月経の時期によって異なり、月経前期(黄体期)においてエラー率が高いという結果が実験結果より得られている。

本研究では、インシデント・アクシデント発生時の業

務状況と月経状態について回答した169人において、調査を行った。インシデント・アクシデント発生時の仕事の状況はいくつもの業務を同時並行に行っている場面で、つまり多重課題の業務状況であったかについて、63.5%が「はい」と答えていた。多重課題ありの業務ではインシデント・アクシデント発生時と有意に関連が認められた。さらに、多忙度の比較でも「多忙」において関連が認められた。一方、多重課題なしの業務は、「普通」の業務内容であることが示された。すなわち、多重課題業務でかつ多忙である時には、インシデント・アクシデントが発生しやすいことが推察された。

次に、多重課題の有無別にインシデント・アクシデント報告内容を比較した結果、全体的には、「診療の補助」「療養上の世話」「記録・その他」の順に多く、両群には関連がなく、先行研究^(1, 10)と同じような結果が得られ

た。インシデント・アクシデント報告内容において、「診療の補助」の詳細をみると、与薬、注射、点滴等の報告内容が多かったが、かならずしも多重課題の業務ではなかった。与薬、注射、点滴等では、多重課題、中断作業、切迫感でインシデント・アクシデントが発生しやすいかと考えていたが、対象者が少ないためか有意差は見られなかった。インシデント・アクシデント報告理由に、「うっかり思い込み多忙によるミス」「知識不足・技術の未熟性」「規則違反」があげられたが、いずれにおいても、多重課題の業務をしているということではなかった。「うっかり思い込み多忙によるミス」の報告理由が6割以上占めたのは、「うっかり」「思い込み」「多忙によるミス」の3項目の理由にもなるが、それを1項目にまとめたことからだと考えられる。また、多重課題業務と多忙との間に関連があったことから、「多忙によるミス」の項目を1選択肢にすると、報告理由でも関連がみられたかもしれない。

インシデント・アクシデント発生時に月経の時期を記憶していた人は15%程度で、それ以外は月経の時期を不明と回答しており、多重課題の業務と月経の時期との関連は明らかにできなかった。ほとんどの女性が月経の時期を記憶していないことや月経前症候群の症状であることを認識していないことがわかった。インシデント・アクシデントの発生時と月経の時期との関連は明確に特定することはできなかったが、「PMSメモリー症状リスト」16の症状から、月経前症候群の症状のひとつである「すぐに眠くなる」の症状において、多重課題の業務と関連が認められた。また、身体症状である「頭痛・頭が重い」「疲れやすい」の症状あり傾向が観察された。すなわち、多重課題の業務で身体症状等の不定愁訴がある場合には、インシデント・アクシデント発生しやすいことが示唆された。一方、精神症状である「寂しくなったり孤独感を感じる」と多重課題の有無別の業務において関連が認められた。しかし、多重課題の業務でない場合に「寂しくなったり孤独感を感じる」と回答者がおり、普通の業務内容でもインシデント・アクシデント発生しやすいことがうかがわれた。

本研究は想起法でインシデント・アクシデント発生時の不定愁訴を調査した結果であり、「すぐに眠くなる」「頭痛・頭が重い」「疲れやすい」「寂しくなったり孤独感を感じる」は、月経前症候群の症状の特徴ではあるが、月経周期と関係なく現れる症状でもあり、必ずしも月経前症候群の症状であるといえない。

前述したように多重課題の業務内容の場合、ワーキングメモリ働きの能力が必要とされる。さらに、多重課題業務の状況下に「すぐに眠くなる」「頭痛・頭が重い」「疲れやすい」の不定愁訴においてもワーキングメモリ働

に影響を及ぼすと考えられる。ワーキングメモリ働きの容量に制約があり、それは個人差もあるが一定の容量を超えるとエラーをおこすとされている⁽⁵⁾。これらから考えると「すぐに眠くなる」「頭痛・頭が重い」「疲れやすい」の不定愁訴が苦痛であれば、苦痛に対する注意力が自分に向き、さらに多重課題の業務状況下ではワーキングメモリ働きの容量を超えてしまい、インシデント・アクシデントが発生しやすくなる。また、多重課題なしの普通の業務内容で「寂しくなったり孤独感を感じる」状態であれば、注意力が自分に向き、ワーキングメモリ働きの低下し、インシデント・アクシデントの発生に影響したかもしれないと考えられる。

これより、インシデント・アクシデント発生時には、多重課題業務と不定愁訴において関連があることが示唆された。

2. インシデント・アクシデント発生の対策について

看護師に係るヒューマンエラーの要因に、多重課題、作業中断、時間切迫をあげている。

多くの現場で看護師は複数の患者を受け持ち、個別のケアを計画的に進めている間にも医師から指示が出たり、他の患者から呼ばれたり、面会の方から声をかけられたり、電話に出たりと、あれもこれもしなければならぬ、多重課題を抱えている。さらに、作業中断は点滴の中に数種類の薬剤を入れる作業をしている途中でナースコールが鳴ると、作業を中断してナースコールに対応する、また、時間以内に薬剤の投与をしなければならないというように時間切迫もあり、このような業務が連続で繰り返されている。医療現場ではこの環境ゆえにミスが起きやすく、その影響が患者の命に直接及んでしまうことが問題である。

これらの対策として、多重課題・作業中断・時間切迫の業務状況下において医療安全を確保するためには、技術の未熟さ・知識の普及・看護体制の整備等を解決することが必要だと考える。その解決策の1つは、新人看護師を対象にした多重課題業務の状況下をシミュレーションし、優先順位を選択した行動がとれることを目的に研修会を開催し、技術の未熟さを解決する方法を積極的に実施することである。2つめは、インシデント・アクシデント発生と多重課題や不定愁訴との関連、月経に伴う症状とセルフケアの促進を目的に、医療安全教育を開催し、知識を普及し、事前に予防対策をとることである。3つめは、多重課題業務において、人員配置の課題や発生しやすい時間帯の人員配置・環境整備・体制整備を実施することである。これらの対策を講じることで、多重課題業務の改善ができると考えられる。

3. 本研究の限界と課題

インシデント・アクシデントの報告を想起法で無記名自記式調査法を行った。

本調査で月経の時期を80%以上が記憶していないことから、月経前の時期において、インシデント発生が多いことについて、明らかにできなかった。また、「PMSメモリー症状リスト」は、月経中や月経後にも出現する症状なので、インシデント・アクシデントが発生した時の身体症状や精神症状が必ずしも月経前症候群の症状であるといえない。

今後の課題として、インシデント・アクシデント報告書に月経の時期・月経随伴症状を追加して記載させることで、月経前症候群と多重課題との関連についても明確な結果が得られると考えられる。その結果を踏まえて、インシデント・アクシデント発生時の月経前症候群との関連を明らかにし、セルフケアについて医療安全の視点から院内教育・研修会を実施することで、医療事故の防止の一助になると考えられる。

V 結論

本研究では、以下のような結果が得られた。

1. インシデント・アクシデント発生時、多重課題業務と多忙度とも関連が認められた。
2. 多重課題の有無別に関係なく、インシデント・アクシデント報告内容や報告理由は同じであった。インシデント・アクシデント報告内容では、両群とも「転倒・転落」、「与薬」が多く、報告理由では、両群とも「うっかり、思い込みによるミス」が6割以上と多かった。
3. ほとんどの看護師は、インシデント・アクシデント発生時の月経の時期や月経状態を記憶していなかった。
4. インシデント・アクシデント発生時には、多重課題業務と不定愁訴において関連が認められた。

(なお、本研究は平成23年度科学研究費補助金萌芽研究：課題番号22659399の助成で実施した)

文献

- (1) 川村治子 (2003) 「ヒヤリ・ハット11,000事例によるエラーマップ完全本」『医学書院』。
- (2) 日本産科婦人科学会 (1999) 「産科婦人科用語解説集 (第2版)」『東京：金原出版』34。
- (3) 相良洋子, 桑原慶紀, 水野正彦 (1991) 「本邦における月経前症候群の疫学的事項と問題点」『産婦人科の実際』40: 1235-1241。

- (4) ダルトン/ホルトン (2007) 「児玉憲典訳：PMSパイブル 月経前症候群のすべて」『学樹書院』254-260。
- (5) Just MA, Carpenter PA : A capacity theory of comprehension: Individual differences in working memory. *Psychological Review* 103 : 773-780, 1992
- (6) Konishi K, Kumashiro M, and Izumi H et al : Effects of the Menstrual Cycle on Language and Visual Working Memory : A Pilot Study *Industrial Health* 47 : 560-568, 2009.
- (7) 浅田義和, 都竹茂樹, 鈴木克明ら (2014) 「新人看護師を対象とした多重課題シミュレーションに関する事前学習 e ラーニング教材の開発計画」『教育システム情報学会 JSiSE2014 第39回全国大会』9月10～9月12日, 203-204。
- (8) 小野澤康子, 吉岡菜緒美, 神林政子ら (2000) 「臨床看護の場におけるインシデントの実態と発生要因の検討」『新潟県立看護短期大学紀要』6 : 71-90
- (9) 小西清美, 石川幸代, 仲村美津枝ら (2011) 「月経前期および不定愁訴が多重課題の課題遂行力に及ぼす影響」『女性心身医学』16 (2) : 153-159。
- (10) 中島和江, 児玉安司 (2000) 「ヘルスケアリスクマネジメント」『医学書院』。
- (11) 月経研究会連絡協議会 (1997) 「PMSメモリー記録編」『日本家族計画協会；東京』。

Relationship between Multitasking Work and the Premenstrual Phase or Unidentified Complaints when Incidents and Accidents Occurred

KONISHI Kiyomi, NASHIRO Kazue, NAKAMURA Mitsue,
ISHIKAWA Sachiyo, NAGAMINE Eriko

Abstract

The purpose of this research is to survey nursing incident/accident reports to clarify the relationship between multitasking work and the premenstrual phase or unidentified complaints when incidents and accidents occurred.

The subjects were people who reported incidents or accidents at 5 general hospitals, and of these, 169 people who reported the working conditions and menstrual state at the time the incident/accident occurred were used as the analysis subjects. The survey method used was to mail anonymous self-reporting questionnaires to the subjects. The results showed that of the reported incidents or accidents, 63.5% of them occurred during multitasking. The ratio between whether or not there was multitasking was unrelated to the type of incident or accident as well as to the reason for the incident or accident. The premenstrual phase was also unrelated. However, the analysis suggested there was a relationship between multitasking work and unidentified complaints pain factors at the time the incident or accident occurred.

Keywords: incidents and accidents occurred, multitasking work, premenstrual phase, unidentified complaints